江戸期から現代までの「かちかち山」絵本の変遷

沼賀美奈子

はじめに

いろり端で昔話を聞く時間は、現代の私たちの日常生活から、ほとんど消えてしまった。しかし、昔話は私たちの前から姿を消したわけではない。

図書館には、本から昔話を覚え語っている新しい語り手の存在がある。また、街の書店を覗けば、そこには、昔話の絵本がたくさん並んでいる。特に昔話絵本は安価なものも出回っており、多くの家庭で読まれている。いまや絵本によって子どもが初めて昔話の世界を知るということは珍しくない。

私たちが抱いている、昔話のイメージもそうした絵本によって作られたり、影響を受けたりしている。江戸時代から現代に至るまで作られ続け、読まれ続ける昔話絵本の魅力とは何か。昔話絵本とは何か。本論では、そうした問題を考える上での第一段階として、昔話がどのように絵本化されてきたかという流れを見たい。取り上げるのは、江戸期から現代までの「かちかち山」絵本である。5大昔話の一つとしてよく知られる「かちかち山」を取り上げたのは、現在まで多く絵本化されており、話の内容も直接的に美徳や悪徳を語るものではないからである。このことにより、豊富な資料にあたることが出来、また昔話絵本の流れを教訓にあまり縛られずに見ることが出来ると考えた。本稿では資料をストーリーの構成と、絵画化場面の構成から分析し、各場面ごとの描かれ方を考察しつつ「かちかち山」絵本化の流れを追う。(表・資料は文末参照。)

1.分析資料

昔話「かちかち山」の絵本化は、江戸期まで辿ることができる。現在、確認されている最も古い作品は、赤小本『本年四つ切りむぢなの敵討』(注1)である。最も新しく刊行されたのは、『ワンダー民話館かちかち山』(注2)である。江戸期から現代まで絵本は、玩具と同様の扱いを受け、長期の保存・保管の対象ではない。そのため、江戸期の草双紙も現代の絵本も多くが散逸しており、現在残っているのは、刊行された作品の一部であると思われる。

現在までに刊行の確認できた「かちかち山」絵本は136作品である。そのうち今回、分析対象として取り上げるのは江戸期に13作品、明治期に24作品、大正期に3作品、昭和に59作品、平成に14作

品、刊行年代不明９作品の合計122作品である[注3]。(表１)

絵本の定義については様々な意見があるが、作業仮説として全てのページに絵のある作品、１冊１話形式の作品を絵本として取り扱うこととした。

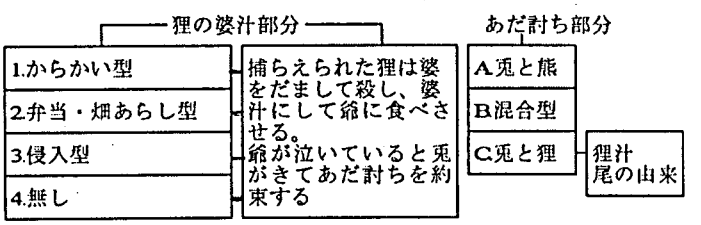
以後、表１の番号を各作品の作品番号として扱い、１『本年四つ切りむぢなの敵討』は(１)と記す。

２.ストーリー構成の分析方法と概観

まず、絵本の中で「かちかち山」がどのような型で語られているかを鳥居訓子[注4]による「かちかち山」の構成を使って見てみる。鳥居は300話以上を分析し、次のようにまとめている。

狸の婆汁部分の１、２、３、４と仇討ち部分のA、B、Cの組み合わせは対応していない。すべての組み合わせがあり、口承資料は大変複雑になっている。ただし、地域によっては無い組み合わせもある。「かちかち山」前半の狸の婆汁部分は単独話の「狸の婆汁」の内容とほとんど同じであり、「狸の婆汁」同様、発端部は１、２、３、４の四つの型がある。あだ討ち部分も、図のように兎が狸をあだ討ちする計略の方法によって三つの型が見られる[注5]。(図１)

図１　かちかち山の構成



A兎と熊型	狸行動 小屋建てカヤ刈 仮病	狸行動 否定 タデ塗り	狸行動 糞づまり、坂下り	狸行動 魚とり 舟こぎ歌	婆汁 尾の由来
B混合型	兎と熊型特有の要素、モティーフを、１～４個含んだもの				
C兎と狸	兎行動 薪拾い、芝刈り	兎行動 見舞い、薬売り とうがらし味噌塗り		兎行動 魚とり、船あそび	

<A兎と熊型>は図中のAにあるモティーフ、要素を５個以上含むもので、狸が兎の許へやって来る、という狸行動が目立つ型である。<B混合型>は<A兎と熊型>と<C兎と狸型>の混合したものの中で<A兎と熊型>のモティーフ１～４個含んだもの。<C兎と狸型>は表のモティーフ、要素を含んだもので、常に兎が狸を訪ねていく型である。

鳥居は外国の類話も視野に入れ、柳田國男や関敬吾などの先行研究(注6)を綿密に分析している。それらを踏まえて多くの話を分析し、全国的分布も初めて明らかにした。鳥居の分類に従って「かちかち山」絵本がどのような型で語られているかを各項目ごとに調べた。(表２)

その結果、次のようにおおよそ４つの節目でストーリーの構成が変化していることが明らかになった。

図２　ストーリー構成の変化

江戸期(1-11)	捕獲理由なし（団子･いたずら）	婆殺害	狸変装	婆汁	あだ討ち部分B
江戸期(12)－明治(33)	捕獲理由なし	婆殺害	狸変装	婆汁	あだ討ち部分C
明治(34)－昭和 (45)	畑あらし	婆殺害	狸変装	婆汁	あだ討ち部分C
昭和(50)－(67)	畑あらし	婆殺害なし	狸変装なし	婆汁	あだ討ち部分C
昭和(68)－	からかい・畑あらし	(婆殺害)	(狸変装)	婆汁なし	あだ討ち部分ＡＢＣ

江戸期から現代までのストーリー構成をみると爺が狸を捕まえる理由、経過と狸が婆を殺害し、爺に婆汁を食べさせる部分、後半の仇討ち部分が時代により変化していることがわかる。江戸期から明治期にかけては狸が捕えられた理由を明確には語らない、狸がすでに捕まっている場面から始まる作品が多い。昭和(41)からは畑荒しやからかいといった捕獲理由や、爺が狸を捕獲している様子が具体的に描かれる。

狸の婆汁部分の後半(狸が婆を殺し、婆汁にして爺に食べさせる)は、昭和40年頃までは必ず語られていた。それ以後は婆が怪我をしただけで婆汁については語られないなど、ストーリーの改変された作品が増えている。婆殺しを語る作品は昭和50年代後半以降再び増加の傾向にあるが、婆汁の語りを省く作品は現代にいたるまで多い。

兎があだ討ちをする後半部は江戸期の作品に、兎が狸のところへ訪ねていったり狸が兎のもとへやってきたりを繰り返している＜B混合型＞が多い。明治、大正期には３回の復讐とも兎のほうから行動を起こして狸のもとへ行く＜C兎と狸型＞になる。昭和になると＜A兎と熊型＞＜B混合型＞の作品も共に見られるなどバリエーションが豊富になっている。

３.場面構成

前節で昔話「かちかち山」のストーリーが絵本の中でどのように語られているかを見た。次に、一冊の絵本の中に昔話「かちかち山」のどういった場面が選ばれているのかを調べる。昔話「かちかち山」を以下の16(+2)場面に分けて、絵画化されている場面を以下に記した。

A　爺が畑仕事をする。

B　狸が登場する。

C　爺が狸を捕獲する。

D　狸が婆をだます。

E　狸が婆を殺す。

F　爺が婆汁を食べる。

G　爺が嘆き、兎が登場する。

H　兎が狸を訪ねる。

I　兎が狸の背に火をつける。

J　狸の背に火がまわる。

K　兎と狸が再び会う。兎は唐辛子等をする。

L　兎が狸の背に唐辛子等を塗る。

M　兎と狸が再び会う。兎は舟を造っている。

N　兎は木船、狸は土舟で出かける。

O　兎と狸が、船べりを叩く。

P　狸が沈む。

Q　(めでたし。爺と兎は、喜ぶ。)(注7)

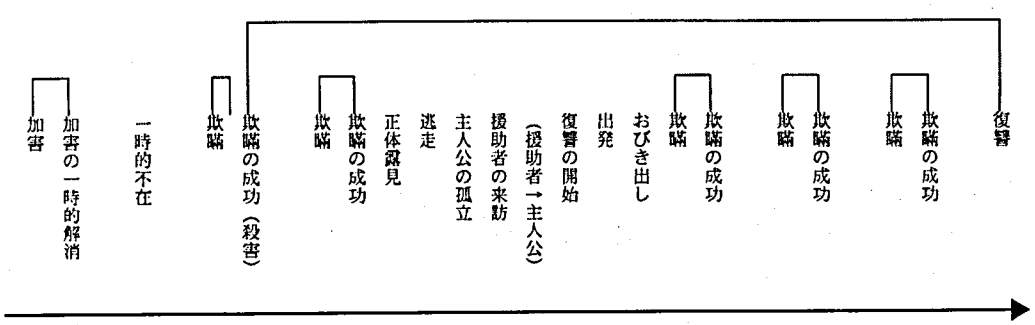
R　(兎が狸を助ける。狸は謝る。)

その結果、江戸時代から現代まで共通して絵画化されている場面は＜G爺が嘆き、兎が登場する場面＞＜J狸の背に火がまわる場面＞＜P狸が沈む場面＞であることがわかった。その次に多く絵画化されているのは＜D狸が婆をだます＞＜E狸が婆を殺す＞＜L兎が狸の背に唐辛子を塗る＞場面である。

＜J狸の背に火がまわる場面＞や＜P狸が沈む場面＞など視覚的に刺激の強い、動きのある場面が選ばれる傾向がある。

これらを昔話「かちかち山」を構造分析した結果と照らしあわせた。(表3)

図3　「かちかち山」の構造



構造分析はプロップ、ダンダスの構造分析(注8)を参考にした上で日本の昔話に適切な用語をあてて行った。すると、共通して絵画化されている場面は昔話「かちかち山」の構造上重要な部分であることがわかる。例えば＜G爺が嘆き、兎が登場する場面＞は「かちかち山」の前半部と後半部の接続部分である。リュティは、以下のように述べている。

> 目に見える孤立性、目に見えない普遍的結合の可能性、これが昔話形式の根本的標識とみなされてよいだろう。孤立した図形が、目に見えないものにひかれて、くみあわさって調和的アンサンブルをなしている。両者がたがいに規定しあう。どこにも根をおろしていないもの、外的関係によっても拘束されず、自己の内面との結びつきによっても拘束されないもの、そういうものだけがいつでも任意の結合をすることができるし、また分離することができる。逆に孤立性は、なにとでも関連をもつことができる能力によってはじめてほんとうの意義を得る。(注9)

＜G爺が嘆き、兎が登場する場面＞は婆を失って孤立したために爺が、周囲に環境を持たない孤立した兎と結びついた重要な場面といえる。昔話におけるファンタジーを形成するに不可欠なものが、目に見える孤立性と目に見えない普遍的結合の可能性であることを考えると、昔話の絵本化の過程で登場人物や場面、エピソードを孤立的に描く工夫をする必要があるだろう。また、＜J狸の背に火がまわる場面＞や＜P狸が沈む場面＞は狸の加害に対応する部分であり「かちかち山」後半部の骨格をを形成しているといえる。昔話の中で反撃は常に初めの加害と等価である。その内容とともに構造も狸の加害と反撃が対応しているのが見られる。

江戸期から＜M舟を作る場面＞も多く描かれているがこれは狸に対する3回の復讐(欺瞞と成功)の一部である。舟を作る場面から狸が沈む場面までの3回目の復讐を前の2回の復讐よりも長く描くのは昔話の3回の繰り返しは「第三回めは前二回よりも長く、かつ強調されている」(注10)という昔話の性質にも妥当する表現である。

このように作家は絵画化する場面の選択の際にページ数との兼ね合いや作家の好み以外にも、昔話の構造や性質に影響を受けている。

4.各場面のイメージの変遷

作品を各場面ごとに分析して、各場面のイメージの変遷を追った。その結果を時系列に沿ってまとめたのが表4である。点線は継続している事を示している。詳細な分析表は割愛するが、いくつかの具体例をあげてそれぞれの場面の描かれ方の変化をみる。

4-1狸の捕獲場面

江戸期には、狸の捕獲場所は畑や野良であると語られている作品もあるが、ほとんどの作品で言及がない。明治の後期以降に畑あるいは山の畑と語られるようになり現在に至る。山の畑は爺と狸が出会う場である。狸にとって爺は山への侵入者であり、爺にとっては狸は畑への侵入者である。この山の畑から起こる爺と狸の争いを小澤は「テリトリー争い」であると指摘している。狸が捕獲される理由については明治後期までほとんど言及されない。これは狸＝害獣であると作者にも読者にも共通して認識されていたからであろう。明治後期からは狸が畑を荒らしたので捕獲したと説明される。昭和43(1968)年からは狸が爺に悪口をいったり、からかったりしたので捕獲するという語りが見られるようになる。これは狸が害獣であるということが読者の共通認識ではなくなったという作者の判断が背景にあろう。狸を罠ではなく、まつやにやとりもちを使って捕まえるようになるのも同じ時期からである。

爺と狸の「テリトリー争い」であるこの場面が時代を追うごとに詳しく描かれることになった背景は他にもあるだろうが、結果的に「日本昔話の世界が、そうした彼岸的世界にとり囲まれていること」「どちらを向いても彼岸世界にぶつかり、彼岸者と出会う、それが人間の住む此岸世界なのだということ」(注11)を表現することとなった。

資料１は江戸期の作品だが「ぢゝい山にたきゝをとりに行きける所に、たぬきをとらまゑわがやゑかへる」と説明があるだけで、爺が狸を捕らえて担いで帰る場面から始まっている。狸の様子は何も触れられていない。昭和元(1926)年の資料２では、狸が畑を荒らす様子の後、爺が罠で狸を捕らえるところが描かれ、狸は「ワアーツイタイ、イタイ」などと悲鳴をあげて涙をこぼしている。このように狸捕獲場面でも現代に近づくにつれて痛みや悲鳴を具体的に文章で語ることが増える。資料２に見られるように水滴の形をつかって涙を表現するのはマンガで発展した形喩の一種で画面に心理的ニュアンスを発生させる効果(注12)を持つが、ここでは狸の痛みの表現として使われている。

4-2婆殺害・婆汁場面

狸が婆を殺害する場面で江戸期、明治期の作品では撲殺、絞殺、刺殺、食い殺し、圧殺、飛びつきなどと殺し方も様々である。しかもその様子がリアルに詳細に描かれている。本来、昔話に登場する人物には肉体的奥行きがない。リュティは以下のように述べている。

> 昔話の登場者はあたかも紙で作った図形のようで、好きなように切りとってもべつに本質的変化が生じるものではない。原則的にいって、このような傷害を受けても肉体的、精神的苦痛は表明されない(注13)。

しかし、婆が殺害される場面を絵画化した時、婆の苦悶する表情や硬直した腕などによって肉体

的、精神的苦痛は表面化している。このように本来の昔話の様式から離れてしまうという問題が昔話を絵画化する場合にはあらゆる場面で起こる。特に江戸期の草双紙から明治期の豆本に関しては資料３のように今まさに、婆の頭を叩きつけているという描き方をするなど殺害場面を避けることなく描いている。こうしたところから、江戸期の赤本などが昔話そのものを伝えるだけでなく、衝撃的な場を見せる見世物的役割も持っていたのではないかと考えられる。現代に近づくにつれ場面の衝撃性よりも昔話の筋を伝えることに重きを置いた作品が増えてくる。資料４のように殺害の一瞬前や後を描くように変化している。

狸による婆の殺害場面は江戸期(1)から昭和23(1948)年(49)までは例外なく語られ、描かれている。昭和24(1949)年(50)の作品からただ婆が怪我をするだけで、死なない作品が連続する。昭和60年代半ばまで婆が殺害される作品はほとんどない。60年代半ば以降、再び婆が殺害される語りがされるようになる。背景として昔話ブームなどがあり、昔話はそのままの形で伝えるべきであるという認識が広まったことがある。

婆汁の味については江戸期から爺が「婆臭い」といぶかるとされているのが、明治後期から「うまい、うまい」とお代わりまでするという語りに変化している。やがて昭和14(1939)年(45)からは婆汁そのものが消える。婆汁は婆の殺害と同じく昭和40年代半ば以降復活するが、以前よりも語られないようになり今に至る。子どもには残酷すぎるとの作者の考えによるものである。例えば、婆は殺害されず、最後に狸と兎が仲直りするという語りの昭和60(1985)年の作品(92)の後書きには、以下のようにある。

> おばあさんを殺して食べたり、たぬきがおぼれ死ぬなどの描写は、幼児に与えたくありませんので、オリジナル脚色し、明るく楽しいお話にしました。

4-3爺の嘆き・兎登場場面

婆が殺されて爺が嘆いている場面では資料５、資料６のように兎に爺が泣きながら事の次第を話す。資料５は江戸期の作品、資料６は昭和25(1950)年の作品だが構図も継承されてきている事がわかる。資料５、資料６に見られるように写実的な描写から輪郭線を強調した描写へという変化は、作品全体を通して見られる。このとき兎は爺に対して「自分が敵を討つ」と宣言するが、それも昭和25(1950)年(54)から「ぼくがなんとかする」「懲らしめてあげる」「謝らせる」と言い回しが変化している。ここに、あだ討ち色が徐々に弱まっているのがみてとれる。

元々は、次のような背景があった。

> 江戸時代に敵討が許されていたのは、主として倫道の上から止むを得ないことであるとし

たのでしょう。殊に武士道のみならず儒教が盛んであって、不倶戴天などという教えはいよいよ奨励せられた(注14)

あだ討ちは是認されるどころか、奨励されていた。江戸末期には、あだ討ちがあると読売がその事実を大げさに書き、摺物にして売り歩き、それをもとに小説家が小説を書き、とあだ討ちは世間にもてはやされていた。あだ討ちは明治6(1873)年2月7日の太政官布告第37号によって禁じられたが、その後も歌舞伎のあだ討ちものの人気は大変なものであった。児童文学のはじめとされる巌谷小波の「こがね丸」もあだ討ちものである。それが、昭和25(1950)年から「あだ討ち」という言葉すら使用しなくなったのは、やはり第二次世界大戦の影響が大きかったのであろう。

4-4 復讐①

兎が狸に行う復讐は3回ある。1回目は狸に柴を背負わせて火を付け火傷させるというものである。この場面は全ての時代を通して描かれている。兎があだ討ちにでかけ狸を柴刈りに誘う方法については、ほとんど言及がない。江戸期、明治期、大正期には、(2,3)をのぞいて全く触れられていない。昭和42(1967)年(68)以降、歌や食べ物で狸をおびき寄せるようになる。歌の内容は「かやかやかれかれ　千ばかれ　あすは　ちょうじゃの　やねがえだ」と長者の家に茅を持っていけば金が儲かると知らせるものである。狸をおびき出すのに使われる食べ物は江戸期(2,3)と昭和53(1978)年(82)までは、いり豆が使われる。その後、団子やもち、焼芋、蒲焼などと変化している。現代の昔話絵本の作家や出版社が目新しさを出し、子どもの興味を引くために趣向をこらしているのが見て取れる。

江戸期(2)には食べ物によっておびき出される狸を「たぬき心いやしければ、ちともらいくいけり」などと描写している。しかし、昭和、平成の作品には狸を卑しいものとして描写していない。むしろ、食べ物に誘われる様子が子どもらしさの表れとして読める。これは、狸が幼児体型のアニメキャラクターのように描かれているからである。「かちかち山」が残酷であるという印象やストーリーの改変には、狸を幼児として造形した作品が多く刊行されたことが深く関っているのではないだろうか。

兎が狸の背に火をつけると、火打ち石の音を聞きつけた狸が「かちかちというのは、何の音か？」と尋ね、兎が「かちかち山だからかちかちいうのだ。」などと答える。昭和40年代からは、「かちかち鳥の鳴き声だ。」と答えるなど、受け答えの種類が増える。

江戸期には資料7のように、1画面を使って炎も小さく描かれている。昭和に入ると資料8のように2画面以上をこの場面に割き火が燃えあがる様子も大きく描く作品が増え、昭和51(1976)年(78)以降は3・4画面を使って炎の燃える様子を描いている。「かちかち山」の題名が定着したのは明治末だが、「かちかち山」の中心的場面として1回目の復讐を描いているのは昭和40年代以降である。

4-5 復讐②

全ての時代を通して１回目、３回目の復讐が欠けている作品は見られない。しかし、２回目の復讐がない作品は江戸期から現代までに12作品ある。伝統的な語り手の語りでは、３回の繰り返しの２回目が少し短くても完全に省略されることはない。絵本化される場合には作家の考えによって伝承と異なる形に再話されている。２回目の復讐が語られている作品では１回目、３回目の復讐よりも短く語られたり、ページ数を少なく描かれている場合が多々みられる。

これは、昔話が３回の繰り返しを好むばかりでなく「一回めに比して二回めはやや短く、三回めがいちばん長い」(注15)という性質を持ち、それが絵本化される場合にも影響しているからであろう。

描かれ方の変化としては資料９のようにじっと座っている狸の様子が見られるのみであったのが、昭和46(1971)年の資料10から狸が飛び上がるという表現が増加し、定着していく。登場人物が宙に飛び上がっている様子を線などで表すのは、漫画の影響を多分に受けた表現である。また、３回目の復讐で狸が救われる作品では、２回目の復讐で狸の痛みを大きく描く傾向がある。

4-6 復讐③

最後の復讐は、土船にのった狸を水中に沈めて殺すというものである。全ての時代を通じて、この場面は必ず語られるが、その描かれ方には多少の変化が見られる。江戸期から明治後期までは狸が溺死でなく、兎に打ち殺されることもあり、絵では資料11のように狸がちょうど海に落ちるところが描かれることが多い。大正4(1915)年資料12では腰まで、昭和34(1959)年資料13では首まで、昭和51(1976)年の資料14では水面下まで沈んでいる狸が描かれているのが見られるが、時代が移るにつれ狸の沈む場面を最後まで描いている作品が増えている。溺れている様子を描いて時間の経過を感じさせるものも多く「平面的な昔話の世界には時間の次元も欠けている」(注17)という昔話の語りの様式とは離れている。

本来の昔話から離れるといえば、昭和26(1951)年(55)以降最後に狸が謝り、兎に助けられるという語りが出現する。１作品を除いて、婆が怪我しただけの場合である。婆を怪我をさせただけなので狸を助けるという展開になったとも、狸を殺さずにハッピーエンドにするために婆が怪我するだけにしたとも考えられる。いずれにしても、登場人物の死を避けたことでストーリー全体が改変される結果になっている。

5．まとめ

江戸期から現代までの「かちかち山」絵本のストーリーの構成、絵本化されている場面構成、各場

面の描かれ方を詳細にみてみると、時代によって重点を置いて描かれているイメージの異なることが明らかになった。そこでイメージのあらわれ方の変化によって、江戸期から現代までの「かちかち山」絵本化の流れを以下の４期にわけることが出来るのではないかと考えた。

１期―江戸期の赤小本『むぢなの敵討』から 1888（明治21）年豆本『かちかち山』まで。

２期―1895（明治28）年『兎の仇討』から 1938（昭和13）年講談社の絵本『かちかち山』まで。

３期―1950（昭和25）年『かちかちやま』から 1966（昭和41）年『かちかちやま』まで。

４期―1967（昭和42）年『かちかちやま』から、1998（平成10）年『かちかち山』まで。

以上の４期にわけて、それぞれの時代で「かちかち山」がどのような所に重点をおいて絵本化されているのかを明らかにする。

１期

１期の作品は江戸期草双紙とその影響を強く受けている明治の豆本である。「かちかち山」の絵本化の初期段階であり、「かちかち山」絵本の原型といえる。江戸期には昔話が雅文調で記されるなどしていて口承のままの語りは重んじられなかった。絵本においても口承の語りの世界よりも芝居や見世物的な脚色が好まれている。

１期では婆の殺害場面に焦点があてられている。婆を殺害する方法も撲殺に加え、絞殺、刺殺、圧殺、食い殺し、飛び付きなど後の時代の作品には見られない殺害方法が描かれている。殺害の場面をほとんどの作品が画化している。野生動物の姿で捕獲された狸が、顔だけ狸の人間の姿になり、婆を殺害する。殺害の瞬間の狸の力強い動きや婆の苦悶する表情を巧みに捉えて、詳細に描いている。２期以降の絵本表現と比較すると、非常に残酷で生々しい印象を受ける。

婆の殺害に重点を置いて描く一方で、１期の作品は狸を捕獲する場面をあまり語らない。爺の畑仕事や狸のいたずらの内容についても重要視していない。爺が狸を捕らえてきたという事実のみを語り、狸が軒先に吊るされている絵から始まる作品も多い。

兎による１回目の復讐は兎が狸の背に火をつけ、何の音かと尋ねる狸を「ここはかちかち山だ」と騙し、火傷をさせるというものである。１期の作品では狸の問いかけに対する兎の答えそのものが、１回目の復讐場面での中心である。狸の問いに対し「ここはかちかち山だ」と即興で答える兎の機知に焦点があてられている。江戸期の作品では狸の背に燃える炎も小さく描かれ、火が燃えあがることは重要視されていない。このため、他の時期の作品と比較すると迫力もなく、話の中心という印象は薄い。江戸期には『兎大手柄』『兎の仇討』などの題名が見られ、「かちかち山」に統一されていないことも背景にある。題名が「かちかち山」に統一されるのは明治18（1888）年（30）以降である。

２回目の復讐は変化が少ない。どの時代にも特に重視されることがない部分である。狸の家で兎が狸の背に唐辛子味噌を塗るという動きの少ない２回目の復讐は、絵に描く場合も衝撃的な場面に

はならない。1回目、3回目の復讐に見られるような狸と兎のやり取りや、歌などもない。視覚的にも聴覚的にもあまり印象の強くない場面である。時代ごとの変化も少ない。1期では狸と兎が舟を作る場面と同じ画面に描かれることも多い。兎が狸に唐辛子味噌を塗っている場面の構図は、江戸期に描かれたものが4期まで継承されている。他の復讐に比べ短く簡潔に語られており、3回の出来事の2回目は短く語られるという昔話の性質が見られる。

3回目の復讐は兎が狸を土船に乗せて海に沈める。全ての作品で必ず語られ、描かれる。話の結末となる重要な部分であり、全ての時代を通して重点を置かれるが、狸の殺され方には変化がある。

1期江戸期から明治28(1895)年(34)までは狸が兎に櫂で打ち殺される場合と、土舟が崩れて溺死する場合がある。狸が兎に打ち殺されるのは1期にのみ見られる。明治21(1888)年(33)までの作品は兎が舟上で櫂を振り上げ、狸が頭から海へ落ちる様子が描かれている作品が多い。この時期の作品には、狸が溺れている様子を語るものが少ない。狸が海に打ちこまれて終わるので、他の時代の作品と比較すると時間の経過や狸の苦しみは、あまり感じられない。

2期

2期には特に焦点を当てている場面はない。それぞれの場面で論理的、常識的に説明を加え「かちかち山」絵本の新たな原型となるような絵本を作ろうという意図が感じられる。以下のように出来事の因果関係の描写に力を入れているところである。

明治28(1895)年からは、狸の捕獲場面が描かれる。(39)には「だいじな　はたけを　あらした　たぬき、わなに　かゝつて　この　とほり。」とある。畑や作物が爺にとって大切なものであることが語られ、畑を荒したので捕まったのだと狸の捕獲の理由を強調している。また、兎と爺が仲良しであったと語り、兎があだ討ちする背景を描いて説得力を持たせている。「昔話の人物は内的世界をもっていないばかりでなく、周囲の世界ももっていない」(注18)ので、本来の語りからは離れている。

1期に描かれた様々な婆の殺害方法は姿を消し、杵による撲殺に統一される。麦つきをすると言って騙して殺す場面では、杵による撲殺は非常に合理的、常識的な語りである。

3回目の復讐の狸の沈む場面は頭から海に落ちる狸の全身が描かれていたが、明治28(1895)年(34)から水中に腰から下まで沈み、溺れる狸を描く作品が増える。語りも詳細になる。

3期

3期の作品は婆や狸を救うことに重点を置いている。本来の「かちかち山」では婆は殺害され、狸は溺れ死ぬ。しかし、3期の絵本では婆は殺害されず、怪我をするだけである。婆汁もない。狸が、溺れるところを助けられる作品も出てくる。婆殺害や狸の死を避ける一方で、痛み、悲鳴が多く語られるようになるのも3期の特徴である。背に唐辛子を塗られた狸を「たぬきはとびあがり、『いたいよ

たすけて　くるしいよ』」(53)と語る。一見矛盾している現象にも思えるが、昔話の抽象化された語りが作家の念頭にないので婆や狸の死を語ることを避けたと考えられる。

3期では、2回目の復讐にも焦点が当てられている。3回目の復讐で溺れる狸を助けるので、2回目の復讐に力を入れ、狸に灸をすえるという考えだろうか。2回目の復讐は狸の家で狸に唐辛子味噌を塗るもので、動きが少ない。描かれる構図も大きく変わらずに江戸期から現代まで継承されている。狸が布団の上で背を出して座り、その横で兎が刷毛を持って座っている。3期昭和32(1957)年(60)になると唐辛子味噌を塗られた狸が飛び上がる絵が描かれるなどの変化が見られる。以後、江戸期から継承される構図の作品とともに床から高く飛び上がる狸の様子が描かれるようになる。

兎が爺にあだ討ちを申し出るとき、江戸期から昭和18(1943)年(47)までは必ず「かたきをとってあげます」(5)などとあだ討ちであることを宣言していた。しかし、3期から「やっつけてあげます」(61)、「あやまらせてやりましょう」(65)と兎があだ討ちであることを明確にしない作品が出てくる。最後に狸が謝ると許して、助けるので、実際にはあだ討ちではなくお仕置きの話になっている。戦前の教育や倫理観が否定されて様々な分野に及ぶ一連の戦後改革のもとで、子どもには「勇ましく」することよりも皆と「仲良く」することを求めるようになった表れといえる。

4期

4期では狸の捕獲場面に重点を置いている。2期からやや詳しく語られ出したが、3期では詳しく語られなかった。それが4期では非常に重要な場面として扱われている。爺が汗水流して畑仕事をしているところや実った作物を前に喜ぶ姿もある。爺の労働について詳しく言及することで、狸の畑荒しという行為が卑劣なものであるというイメージをもたらす。狸に畑を荒されているために、爺と婆の生活が苦しいと語る作品もあり、狸の行為がただのいたずらで済まされるものではないことを強調している。

昭和42(1967)年の『かちかち山』(68)からは狸の捕獲理由にからかいが描かれるようになる。爺の種まき歌と、それに対する兎の悪意ある替え歌が語られる。ここでも、労働の貴さとそれを踏みにじる狸の悪といった対照がなされる。

とりもちや、まつやにを切り株に塗って狸を捕らえる描写も出てくる。罠に比べてとりもちや、まつやにで捕獲される場合は、狸が痛みを訴えることが少ない。捕獲場面に焦点をあてて描くようになり、捕獲方法の種類も増えた。

4期からは、兎が狸の背に火をつける場面のやり取りを「かちかち山」「ぼうぼう山」と2回以上繰り返す作品がでてくる。兎の言葉も以前は「ぼうぼう山」や「かちかち山」と場所を答えるだけだったが、「かちかち鳥」や「ぼうぼう鳥」と答えるようになる。

狸が、兎に火傷をさせたことを責めると「それは茅山の兎で、自分は唐辛子山の兎だ」と騙す、兎の否定のやり取りも狸と兎が舟で海に行き歌う舟歌も4期から描かれる。このように4期では、言葉

のやり取りを重視した語りがされている。4期からは、狸の背に炎が燃え広がる様子を刻々と描く作品が増える。以前は、狸が火打ち石の音を何の音かと問うのに対し、「かちかち山」と答える、兎の答えの面白さのみに重点が置かれていた。しかし、昭和25(1950)年以降は狸が兎の答えに騙される様子やその間に火が燃え広がるのに気づかない滑稽さに描写の重点が置かれている。兎が狸の背に火をつけそれが燃え上がり狸が気づくまでが詳細に描かれ、時間の経過を感じさせる。3回目の復讐の狸が沈む場面では水中に首まで沈む、または完全に全身沈む絵が描かれる。ここでも、狸が溺れる様子が詳細で、時間の経過を感じさせる。

以上のように1期では婆の殺害場面に焦点があてられ、狸の捕獲場面や1回目の復讐を重要視していない。2期では各場面の因果関係の描写に力を入れ、狸の捕獲場面や兎が爺を訪れる場面などに細かい説明がなされる。3期では、婆や狸を救うこと重点をおいている。3回目の復讐で、狸を助けるので2回目の復讐を印象づけるように語っている。4期では、狸の捕獲場面と3回目の復讐が特に重要視されて描かれている。こうした流れをいくつかの角度からみると、1期は「かちかち山」絵本の原型の誕生期、2期は赤本の伝統から脱する、新しい表現の模索期、3期は第2次世界大戦などの戦争との関連もあり、絵本表現の画一化と教育的配慮による退行期、4期は昔話ブームや読書運動の盛り上がりなどとも関連した絵本表現の発展期ととらえられるのではないかと思う。

今回、明らかになった「かちかち山」絵本化の変遷の大きな流れを、他の昔話絵本の変遷や時代背景と考え合わせ、長年に亘って堆積した絵本の中の昔話のイメージを明らかにすることを今後の課題としたい。

(本論は、1999年度修士論文『昔話の絵本化－江戸期から現代までの「かちかち山」絵本をめぐって－』の中の「かちかち山」絵本化の流れに関する部分を取りだし、加筆訂正したものである。)

注

1. 国立国会図書館蔵。作者、刊年未詳。
2. 文－水谷章三、絵－村上勉。世界文化社、2000年刊。
3. 資料の検索は、国立国会図書館、都立日比谷図書館、都立中央図書館、岐阜県図書館、大阪国際児童文学館、白百合女子大学付属図書館、板橋区立中央図書館を中心に行った。その他、個人所蔵者、古書店、先行研究、過去の美術展の関連資料からも情報を得た。また、インターネット上で検索可能な全国の公共図書館、大学図書館、研究施設等にあたった。

4. 1945年生、日本口承文芸学会会員。『紫波の民話』(共編、国土社)他
5. 鳥居訓子「「かちかち山」の話型研究」(土曜会編『昔話の成立と展開Ⅰ』土曜会 1991.)p.32
6. 昔話「かちかち山」の先行研究には、柳田國男「かちかち山」(定本柳田國男全集第6巻『昔話と文学』筑摩書房 1972.)、関敬吾「勝々山の構造」(「国語と国文学」至文堂 1953.)がある。海外の類話に関しては、伊藤清司「カチカチ山の比較」(『昔話伝説の系譜』第一書房 1991.)、斉藤君子「「かちかち山」とツングース諸民族の狐昔話」(『なろうど』第16号 1988.)がある。一連の先行研究の主たる関心は「かちかち山」が複合昔話か否か、という問題と婆汁モティーフの起源にある。現在では「かちかち山」は二話以上からなる複合昔話であり、外来の可能性が高いとする節が有力とされている。
7. Q、Rは、昔話の原話型にはないモティーフだが、絵本には多く描かれているため、分析項目に加えた。
8. ウラジミール・プロップ『民話の形態学』白馬書房 1972. アラン・ダンダス『民話の構造』大修館書店 1980.
9. マックス・リュティ『ヨーロッパの昔話』岩崎美術社 1969. p.93
10. 小澤俊夫『昔話とは何か』福武書店 1990. p.92 l.17
11. 小澤俊夫「昔話の彼岸イメージ 昔話における此岸と彼岸の関り方」(『日本昔話のイメージ1』古今社 1998.)p.53 l.2-5
12. 夏目房之介、竹熊健太郎『マンガの読み方』宝島社 1995. p.83
13. マックス・リュティ『ヨーロッパの昔話』岩崎美術社 1969. p.21
14. 平田鏗二郎『敵討』文昌閣 1909. p.34
15. 小澤俊夫『昔話の語法』福音館書店 1999. p.293,l.6-7
16. マックス・リュティ『ヨーロッパの昔話』岩崎美術社 1969. p.33
17. 同掲書 p.27

参考文献

皆本和子 「草双紙に於ける童話研究―「かちかち山」考」(『国文』第46号 御茶の水女子大学 国文学会 1977. p.44-57)

内ヶ崎有里子『江戸期昔話絵本の研究と資料』三弥井書店 1999.

内ヶ崎有里子「『かちかち山』について」(『叢』第13号 近世文学研究叢の会 1990. p.1-22)「『昔噺かちかち山』について(『宇大国語論究』第6号 宇都宮大学国語教育学科 1994. p.38-59)

加藤康子　「翻刻・黒本『むかしむかし御ぞんじの兎』(『梅花女子大学文学部紀要』梅花女子大学文学部 第32号 1998. p. 39-56)

加藤康子　「所謂豆本『かちかち山』について」(『叢』第17号 近世文学研究 1995. p. 325-355)

加藤康子　「所見所伝小本型近世子どもの絵本目録その一」(『平成二年度科学研究費による草双紙研究報告書』東京学芸大学国語教育学科古典文学第6研究室 1991. p.572-612)

鈴木重三　「白百合女子大学所蔵·所収江戸末期子どもの絵本二十三種解題」(『白百合児童文化Ⅰ』白百合女子大学児童文化学会 1989.)

鈴木重三・木村八重子　『近世子どもの絵本集江戸篇』岩波書店　1985.

小澤俊夫　『昔話の語法』福音館書店　1999.

松岡享子　『昔話絵本を考える』日本エディタースクール出版部　1985.

表1　分析資料リスト

0	刊年		文	絵	出版社（者）	ｼﾘｰｽﾞ名・分類	題名
1	未詳		未詳	未詳	未詳	赤小本	本年四つ切りむちなの敵
2	未詳		未詳	未詳	未詳	赤本	兎大手柄
3	1771	明和8	未詳	富川房信	未詳	黒本	昔々御ぞんじの兎
4			未詳	未詳	未詳	黒本	かちく山
5	天保頃		未詳	一斎	未詳	合巻	昔噺かちく山
6			未詳	明重	森屋治兵衛	豆本	かちく山
7			未詳	貞虎、一員斎芳綱	江崎屋	豆本	かちく山
8			未詳	国明、英松	溜屋善兵衛	豆本	かちく山
9			未詳	歌川芳虎	未詳	豆本	かちく山
10			未詳	盛信、一寿斎芳員	万屋吉兵衛	豆本	かちく山かたきうち
11			未詳	未詳	未詳	豆本	かちく山一代記
12			国政	未詳	宮田伊助	豆本	かちく山
13	1850	嘉永3	松亭金水	玉蘭斎貞秀	岡田群鳳堂	豆本	〔うさぎ〕
14	1879	明治12	未詳	未詳	坂田善吉	豆本	かちく山仇討
15	1880	13	小林英次郎	幾蔵斎	野田茂政	豆本	かちく山
16	1881	14	国政	未詳	宮田伊助	豆本	かちく山
17	1882	15	木村文三郎	未詳	木村文三郎	豆本	かちく山噺
18	1882	15	大森銀治郎	未詳	大森銀治郎	豆本	かちく山
19	1884	17	篠田義正	未詳	篠田義正	豆本	かちく山
20	1885	18	堤吉兵衛	未詳	堤吉兵衛	豆本	かちく山
21	1885	18	国政	佐藤新太郎	佐藤新太郎	豆本	かちく山
22	1886	19	未詳	尾崎民太郎	尾崎民太郎	豆本	かちく山
23	1886	19	山本千吉	未詳	山本千吉	豆本	かちく山仇討
24	1886	19	堤吉兵衛	未詳	堤吉兵衛	豆本	かちく山
25	1886	19	綱島亀吉	未詳	綱島亀吉	豆本	昔噺かちく山
26	1886	19	長谷川園吉	未詳	長谷川園吉	豆本	かちく山
27	1887	20	沢久次郎	未詳	沢久次郎	豆本	かちく山
28	1887	20	沢久次郎	未詳	沢久次郎	豆本	兎の仇討ち
29	1887	20	吉田桂之助	未詳	吉田桂之助	豆本	かちく山一代記
30	1888	21	未詳	未詳	小森宗次郎	豆本	かちく山
31	1888	21	堤吉衛兵	未詳	堤吉兵衛	豆本	かちく山
32	1888	21	小林新吉	未詳	小林新吉	豆本	かちく山
33	1888	21	鎌田在明	未詳	鎌田在明	豆本	かちく山
34	1895	28	未詳	未詳	井上市松	教訓はなし	兎の仇討
35	1900	33	うえだかずと	くろさきしうさい	東京開発社	『少年書類』第1編	かちく山
36	1902	35	未詳	未詳	荒川コマ		カチく山
37	1908	41	小波	古涯	博文館	お伽画帖6	カチく山
38	未詳		未詳	未詳	未詳	子供画本	勝く山
39	1915	4	巌谷小波	岡野栄	中西屋書店	日本一の画噺	カチカチヤマ
40	1921	10	複本松之助		複本書店	少年画帖	カチく山
41	1926	1	湯浅彖策		春江堂		新カチカチ山
42	1933	8	巌谷小波		吉田書店出版		ｶﾁｶﾁﾔﾏ･ﾊﾅｻｶｶﾞﾁｲ
43	1934	9	未詳	未詳	泰光堂	ドウワエホン	カチカチヤマ
44	1938	13	松村武雄	尾竹国親	講談社	講談社の絵本第58	かちかち山
45	1939	14		山路露三	春江堂	ムカシバナシ	カチカチ山
46	1940	15		大沼静巌	春光堂	かちかち山	かちかち山
47	1943	18	中尾彰	平野直	教養社		カチカチヤマ
48	1943	18	柴野民三	林義雄	春江堂		かちかちやま
49	1948	23	稲垣蝸堂		綱島島鮮堂	少年教育キレイ画帖	カチく山
50	1949	24	金曾竹太呂		幸文堂		かちかち山
51	1949	24		須々木博	日本絵本社	日本絵本社のお伽絵本	かちかち山
52	1950	25		吉岡陽	光洋社出版	光洋社の家庭絵本	かちかち山
53	1950	25	よしたにまさ		キング		かちかちやま
54	1950	25	柴野民三	おおもりゆみまろ	新子供社		かちかちやま
55	1951	26	秋吉秀彦		トモブック社		かちかち山
56	1952	27	古屋白羊		ます美書房		はなしの絵本
57	1952	27	木下よしひさ		寿書房		かちかちやま
58	1953	28	宮脇紀雄	井口文秀	集英社	よいこの幼稚園えほん	かちかちやま
59	1956	31	土家由岐雄	鈴木寿雄	講談社		かちかちやま
60	1957	32	服部直人	宮田武彦	講談社	講談社のなかよし絵本	かちかちやま
61	1959	34	木下順二	鈴木寿雄	講談社	講談社の絵本ゴールド版	かちかち山
62	1960	35	三越左千夫	井口文秀	トッパン	トッパン愛児えほん	かちかちやま
63	1960	35	小春久一郎	大日方明	ひかりのくに	声のえほん	かちかち山
64	1963	38	三橋雄一	川本哲夫	ます美書房	ポピー絵本	かちかちやま
65	1963	38	久保喬	森国ときひこ	講談社	講談社の絵本クラウン版	かちかち山
66	1965	40	三越左千夫	黒崎義介	ﾌﾚｰﾍﾞﾙ館	トッパンの愛児えほん	かちかちやま
67	1966	41	三越左千夫	若菜桂	主婦の友社	主婦の友こども版	かちかちやま

表1　分析資料リスト

68	1967	42	松谷みよ子	瀬川康男	ポプラ社	むかしむかし絵本12	かちかちやま
69	1967	42	那須田稔	渡辺三郎	鶴書房		かちかちやま
70	1967	42	滝原章助	浜田広介	講談社	講談社の絵本ﾜｲﾄﾞ版21	かちかちやま
71	1967	42	土家由岐雄	深沢邦朗	小学館	世界の童話18日本のおとぎ話	かちかちやま
72	1969	44	虫プロ	虫プロ	ます美書房	ます美のおはなしえほん	かちかちやま
73	1970	45	松谷みよ子	瀬川康男	講談社	日本のむかし話	かちかちやま
74	1971	46	相賀徹夫編	瀬尾太郎	小学館	小学館の育児絵本	かちかちやま
75	1971	46	滝原章介	小春久一郎	ひかりのくに		かちかちやま
76	1974	49	南本史	猿山二郎、槻間八	ポプラ社	日本昔話５	かちかちやま
77	1975	50	秋晴二	梶秀康	いずみ書房	ﾎﾟｹｯﾄ絵本10（せかい童話図書館）	かちかちやま
78	1976	51	愛プロ製作	ｸﾞﾙｰﾌﾟ・ﾀｯｸ	講談社	ﾃﾚﾋﾞまんが日本昔ばなし2ﾃﾞﾗｯｸｽ版	かちかちやま
79	1976	51	筒井敬介	水沢研	小学館	ﾋﾞｸｼｰ絵本第７０	かちかちやま
80	1977	52	岡信子	童公佳	金の星社		かちかちやま
81	1977	52	ひろみプロ		高橋書店		かちかちやま
82	1978	53	福田清人	若葉珪	講談社	講談社の絵本４	かちかち山
83	1978	53	筒井敬介	村上勉	あかね書房	えほんむかしばなし4	かちかちやま
84	1978	53	ｽﾀｼﾞｵIWAO	ひぐちたろう	若木書房	おはなしおりがみ５	かちかちやま
85	1980	55	おばらあやこ	ひゃくたやすたか	学研	ひとりよみ名作	かちかちやま
86	1980	55	小沢正	なかのひろたか	ﾁｬｲﾙﾄﾞ本社	ﾁｬｲﾙﾄﾞ絵本館	かちかちやま
87	1982	57	渋谷勲	島田明美	コーキ出版	絵本ファンタジア	かちかちやま
88	1983	58	平田昭吾	成田マキホ	ポプラ社	ｱﾆﾒﾌｧﾝﾀｼﾞｰ38	かちかちやま
89	1984	59	岩崎京子	黒井健	フレーベル館		かちかちやま
90	1985	60	若林利代	清宮哲	金の星社	せかいの名作ぶんこ	かちかちやま
91	1985	60	平田昭吾	井上智	ポプラ社	世界名作ﾌｧﾝﾀｼﾞｰ14	かちかちやま
92	1985	60	卯月泰子	高橋信也	永岡書店	名作ｱﾆﾒ絵本ｼﾘｰｽﾞ16	かちかち山
93	1986	61	香山美子	渡辺三郎	ﾁｬｲﾙﾄﾞ本社		かちかちやま
94	1986	61	ｽﾀｼﾞｵアップ		ぎょうせい	ぎょうせい知育絵本	かちかちやま
95	1986	61	木暮正夫	赤星亮衛	小学館	国際版はじめての童話17	かちかちやま
96	1987	62	田島征三		三起商行	ﾐｷﾊｳｽの絵本	かちかちやま
97	1987	62	立原えりか	ｻﾝﾘｵｱﾆﾒｽﾀｯﾌ	サンリオ		かちかちやま
98	1988	63	おざわとしお	赤羽末吉	福音館		かちかちやま
99	1988	63	横田弘行	ひとみ座人形劇	集英社	NHKﾃﾚﾋﾞ人形劇日本昔話	かちかちやま
100	1989	平成１	川田由美子	成田マキホ	ポプラ社	ｽｰﾊﾟｰｱﾆﾒﾌｧﾝﾀｼﾞｰ24	かちかちやま
101	1989	1	中島和子	木曽健司	ひかりのくに	はじめてふれるｱﾆﾒ名作絵本	かちかちやま
102	1989	1	松谷みよ子	井上洋介	講談社	講談社のおはなし絵本館2	かちかちやま
103	1989	1	瀬尾七重	富永秀夫	主婦と生活社	日本昔ばなし絵本	かちかち山
104	1990	2	西本鶏介	高橋信也	ポプラ社	ｱﾆﾒむかしむかし絵本５	かちかちやま
105	1990	2	鶴見正夫	長新太	偕成社	じぶんで読む日本むかし話2	かちかちやま
106	1993	5	藤井いづみ	井上洋介	TBSﾌﾞﾘﾀﾆｶ	日本名作絵本7	カチカチ山
107	1994	6	川崎洋	梶山俊夫	フレーベル館	名作えほんライブラリー	かちかちやま
108	1995	7	平田昭吾	大野豊	ブッティック	よい子とママのｱﾆﾒ絵本62	かちかちやま
109	1995	7	末吉暁子	長新太	講談社	はじめてのおはなし絵本18	かちかちやま
110	1995	7	童夢		主婦と生活社	日本昔話の森	かちかち山
111	1997	9	わらべきみか		ひさかたﾁｬｲﾙ	あかちゃんめいさく	かちかちやま
112	1998	10	松谷みよ子	野村俊夫	講談社	むかしむかし７	かちかち山
113	1998	10	柿沼美浩	難波高司	永岡書店	日本昔ばなしｱﾆﾒ絵本1	かちかち山
114	未詳		宇野素月	南部新一編	青蘭社	幼年画帖	カチカチヤマ
115	未詳		未詳	未詳	未詳		かちかち山
116	未詳		松村又一	岩崎大子	荻原宏文堂		カチカチ山
117	未詳		未詳	TOSHIO（鈴木寿	金井	エノオトギNo.11	カチカチ山
118	未詳		鈴木寿雄	鈴木寿雄		王様ブック	カチカチ山
119	未詳		未詳	未詳	未詳		かちかち山
120	未詳		立原えりか	深沢邦朗	小学館	かさこじぞう	かちかち山
121	未詳			高野てつじ	ひばり書房	ひばりのえほん	カチカチ山
122	未詳		未詳	未詳	育英音響㈱	ｿﾉﾋﾞｼｮﾝ声の出る絵本	かちかち山

表２－①　ストーリー構成

0	1からかい型	2弁当・畑あらし型	3侵入型	4無し	婆殺し	変装	婆汁	A兎と熊型	B混合型	C兎と狸型
1				※	婆殺し	欠	婆汁	欠		
2				※	婆殺し	（絵）	婆汁		B混合型	
3				※	婆殺し	変装	婆汁		B混合型	
4	（化かす）				婆殺し	変装	婆汁		B混合型	
5			（家でいたずら）		婆殺し	変装	婆汁		B混合型	
6				4無し	婆殺し	変装	婆汁		B混合型	
7				4無し	婆殺し	変装	婆汁		B混合型	
8				4無し	婆殺し	変装	婆汁		B混合型	
9				4無し	婆殺し	変装	婆汁		B混合型	
10		（兎の食物を盗む）			婆殺し	変装	婆汁		B混合型	
11				4無し	婆殺し	変装	婆汁		B混合型	
12				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
13				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
14				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
15				4無し	婆殺し	欠	欠			C兎と狸型
16				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
17		（いたずら）			婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
18				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
19				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
20				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
21				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
22				欠	婆殺し	変装	欠			C兎と狸型
23				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
24		（いたずら）			婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
25				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
26				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
27				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
28				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
29				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
30				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
31				4無し	婆殺し	変装	婆汁		B混合型	
32				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
33				4無し	婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
31		（いたずら）			婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
35	1からかい型	2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
36	○			4無し	婆殺し	変装	婆汁	欠		
37		2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
38				4なし		変装	婆汁			（C兎と狸
39		2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
40	○				婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
41	○	2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁			（C兎と狸
42		2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁			C兎と狸型
43		（いたずら）			（殺し）	変装	婆汁			C兎と狸型
44		2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と狸型
45		2畑あらし型			（殺し）	変装	婆汁			C兎と狸型
46		2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と狸型
47		2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と狸型
48		2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と狸型
49				4無し	婆殺し	変装	婆汁		B混合型	
50		（いたずら）			×	×	×	異		
51		2畑あらし型			婆殺し	×	×	異		
52		2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と狸型
53		（いたずら）			×	×	×			C兎と狸型
54		2畑あらし型			（殺し）	×	×			C兎と狸型
55		（わるいことばかり）			×	×	×			C兎と狸型
56		（いたずら）			×	×	×			C兎と狸型
57		2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と狸型
58		2畑あらし型			×	×	×	欠		
59			（鶏を取る）		×	×	×	異		
60		2畑あらし型			×	×	×			C兎と狸型
61		2畑あらし型			×	×	×			C兎と狸型
62		2畑あらし型			婆殺し	×	×	異		
63		2畑あらし型			×	×	×			C兎と狸型
64		2畑あらし型			×	×	×			C兎と狸型
65		2畑あらし型			×	×	×			C兎と狸型
66		2畑あらし型			×	×	×			C兎と狸型

表2－① ストーリー構成

67				4無し	なし	なし	なし			C兎と理型
68	1からかい型	2畑あらし型			婆殺し	なし	×	A兎と熊型		
69		2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁			C兎と理型
70	1からかい型	2畑あらし型			×	×	×			C兎と理型
71		2畑あらし型			×	×	×		B混合型	
72		2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁			C兎と理型
73	1からかい型	2畑あらし型			婆殺し	×	×	A兎と熊型		
74		2畑あらし型			×	×	×			C兎と理型
75	1からかい型	2畑あらし型			×	×	×			C兎と理型
76	1からかい型	2畑あらし型			婆殺し	×	×		B混合型	
77		2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と理型
78		2畑あらし型	3侵入型		婆殺し	×	×			C兎と理型
79	1からかい型				婆殺し	×	×			C兎と理型
80		2畑あらし型			×	×	×		B混合型	
81		2畑あらし型			婆殺し	×	×		B混合型	
82		2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁			C兎と理型
83	1からかい型				婆殺し	×	×			C兎と理型
84		（いたずら）			婆殺し	×	×			C兎と理型
85		2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁			C兎と理型
86	1からかい型				婆殺し	×	×	A兎と熊型		
87	1からかい型				婆殺し	変装	婆汁			C兎と理型
88		2畑あらし型			×	×	×			C兎と理型
89	1からかい型				婆殺し	変装	婆汁			C兎と理型
90	1からかい型				婆殺し	変装	×			C兎と理型
91	1からかい型	3畑あらし型			×	×	×			C兎と理型
92	1からかい型	2畑あらし型			×	×	×			C兎と理型
93	1からかい型				婆殺し	×	×	A兎と熊型		
94			3侵入型		×	×	×			C兎と理型
95	1からかい型	2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁	A兎と熊型		
96	1からかい型	2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁	A兎と熊型		
97	欠				欠					C兎と理型
98	1からかい型				婆殺し	変装	婆汁	A兎と熊型		
99		2畑あらし型			婆殺し	×	×		B混合型	
100		2畑あらし型			×	×	×			C兎と理型
101		2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と理型
102	1からかい型	2畑あらし型			婆殺し	変装	×	A兎と熊型		
103		2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁		B混合型	
104	1からかい型				婆殺し	×	×	A兎と熊型		
105	2からかい型	2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と理型
106	1からかい型	2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁			C兎と理型
107	1からかい型	2畑あらし型			婆殺し		婆汁		B混合型	
108	1からかい型	2畑あらし型			×	×	×			C兎と理型
109		2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と理型
110	1からかい型				婆殺し	変装	婆汁		B混合型	
111		2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と理型
112	1からかい型	2畑あらし型			婆殺し	×	×	A兎と熊型		
113	1からかい型	2畑あらし型			×	×	×		B混合型	
114		2畑あらし型			婆殺し	変装	婆汁			C兎と理型
115		2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と理型
116		2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と理型
117	欠									
118		（いたずら）			婆殺し	変装	婆汁			C兎と理型
119	欠				欠	欠	欠			（C兎と理型
120		2畑あらし型			婆殺し	×	×			C兎と理型
121		2畑あらし型			（殺し）	×	×			C兎と理型
122		2畑あらし型			（殺し）	×	×			C兎と理型

表2－② ストーリー構成(あだ討ち部分)

0	狸	小屋立て	カヤ	仮病	狸	否定	タデ塗り	狸	魚とり	船歌	狸汁	兎	薪拾	柴刈	兎	見舞	薬売り	味噌	兎	魚とり	船遊び
1																					
2	狸				狸		タデ							柴刈							船遊び
3	狸	小屋立て	カヤ		狸									柴刈			薬売り		兎		船遊び
4												兎							兎		
5								狸	魚とり			兎		柴刈	兎	見舞		味噌			
6					狸			狸	魚とり			兎		柴刈				味噌			
7					狸			狸	魚とり			兎		柴刈				味噌			
8					狸			狸	魚とり			兎		柴刈				味噌			
9								狸				兎		柴刈	兎	見舞		味噌			
10								狸				兎		柴刈	兎	見舞		味噌			
11								狸	魚とり			兎		柴刈	兎	見舞		味噌			
12												兎		柴刈	兎	見舞		味噌			
13								狸				兎		柴刈							
14												兎	薪拾		兎	見舞		味噌	兎		船遊び
15												兎		柴刈	兎			味噌	兎		船遊び
16												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎		船遊び
17												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
18												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
19												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
20												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
21												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
22												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
23												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
24												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
25												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
26												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
27												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
28												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
29												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
30												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
31								狸				兎		柴刈	兎	見舞		味噌		×	
32												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎		船遊び
33												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎		
34												兎		柴刈	兎	見舞	薬売り		兎	魚とり	
35												兎	山遊び	柴刈	兎		薬売り		兎	魚とり	
36																					
37												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎		船遊び
38												兎		柴刈	兎			味噌	兎	×	
39												兎		柴刈	兎		薬売り	味噌	兎		船遊び
40												兎		柴刈	兎		薬売り		兎		船遊び
41												兎	山遊び								
42												兎	山遊び	柴刈	兎	見舞			兎		船遊び
43										船歌		兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎		船遊び
44												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎		船遊び
45												兎		柴刈	兎			味噌	兎		船遊び
46												兎		柴刈	兎	見舞			兎		船遊び
47												兎		柴刈	兎	見舞			兎	×	
48												兎		柴刈	兎		薬売り	味噌	兎		船遊び
49								狸						柴刈	兎		薬売り	味噌	兎		船遊び
50														柴刈	兎		(医者)				
51												兎	薪拾						兎	×	
52												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
53												兎		柴刈	兎			味噌	兎		船遊び
54												兎		柴刈	兎			味噌	兎	×	
55												兎	薪拾		兎		薬売り	味噌	兎		船遊び
56												兎	薪拾		兎	見舞		味噌	兎	×	
57												兎	薪拾		兎	見舞		味噌	兎		船遊び
58																					
59												兎	薪拾						兎	×	
60												兎	薪拾		兎	見舞			兎		船遊び
61												兎	薪拾		×	×			兎		船遊び
62												兎		柴刈	兎				兎	魚とり	
63												兎		柴刈	兎	見舞			兎		×
64												兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×	
65												兎	薪拾		×	×			兎		船遊び
66												兎		柴刈	×	×			兎	魚とり	

表２－② ストーリー構成(あだ討ち部分)

67											兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
68	狸		カヤ		狸	否定		狸	魚とり	船歌							味噌				
69											兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎		船遊び	
70											兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
71								狸	魚とり		兎	薪拾		×	×						
72											兎	薪拾		兎	見舞		味噌	兎		船遊び	
73	狸	小屋			狸	否定		狸	魚とり	船歌							味噌				
74	狸										兎		柴刈	兎	見舞		味噌			船遊び	
75											兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎		船遊び	
76	狸				狸	否定		狸	魚とり	船歌	兎		柴刈				味噌				
77										船歌	兎	薪拾		兎	見舞		味噌	兎		船遊び	
78	狸			仮病	狸	否定		狸	魚とり		兎	薪拾					味噌				
79								狸			兎	薪拾		兎	見舞		味噌			船遊び	
80								狸		船歌	兎	薪拾		兎	見舞		味噌				
81	狸							狸		船歌	兎	薪拾		兎	見舞		味噌			船遊び	
82	狸										兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
83								狸			兎	薪拾		兎	見舞		味噌			船遊び	
84											兎	薪拾		×	×			兎		船遊び	
85											兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
86	狸		カヤ		狸	否定	タデ塗り	狸	魚とり	船歌											
87										船歌	兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
88	狸										兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
89	狸									船歌	兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎		船遊び	
90										船歌	兎	薪拾		兎		薬売り	味噌	兎	魚とり		
91	狸										兎		柴刈	兎	見舞	薬売り	味噌	兎	魚とり		
92	狸										兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
93	狸	小屋			狸	否定	タデ塗り	狸	魚とり	船歌											
94	狸											薪拾		兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
95	狸	小屋			狸	否定	味噌塗り	狸	魚とり												
96	狸	小屋			狸	否定		狸	魚とり								味噌				
97											兎	薪拾		兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
98	狸	小屋			狸	否定		狸	魚とり	船歌							味噌				
99	狸				狸		味噌塗り	×	（兎を追いかけ）			薪拾									
100											兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
101											兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
102	狸	小屋			狸	否定		狸	魚とり	船歌							味噌				
103	狸	小屋						狸	魚とり												
104	狸	小屋			狸	否定	タデ塗り	狸	魚とり	船歌											
105						否定		狸	魚とり		兎		柴刈	兎	見舞		味噌	×			
106											兎		柴刈	兎		薬売り	味噌	兎		船遊び	
107																					
108	狸										兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
109	狸									船歌	兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
110		小屋						狸	魚とり		兎			兎	見舞		味噌				
111	狸										兎	薪拾					（味噌	兎	魚とり		
112	狸	小屋			狸	否定		狸	魚とり	船歌							味噌				
113	狸							狸	魚とり		兎		柴刈	兎	見舞		味噌				
114											兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎		船遊び	
115													柴刈				味噌			船遊び	
116													柴刈	兎	見舞		味噌	兎		船遊び	
117								狸			兎	薪拾		兎	見舞						
118											兎	薪拾		兎	見舞		味噌	兎		薬取りに	
119											兎	薪拾		兎	見舞		味噌	兎		船遊び	
120											兎	薪拾		兎	見舞		味噌	兎	魚とり		
121											兎		柴刈	兎		薬売り	味噌	兎	×		
122											兎		柴刈	兎	見舞		味噌	兎	×		

表3　場面構成

0	A	B	C	D	E	F	犯	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R
1	A		C	D	E	F	欠												
2	A		C	D		F	犯	G	H	I	J	K		M			P		
3	A		C	D	E	F	犯	G2	H	I	J	K		M3			P		
4			C	D	E	F		G	H	I	J	K			N		P	Q	
5		B			E	F		G	H					M			P	Q	
6			C		E			G	H		J	K	L	M			P		
7					E	F	犯			I	J	M					P	Q	
8			C		E		犯	G											
9				D	E		犯	G			J	K		M2			P		
10				D	E	F		G	H	I	J	K		M			P	Q	
11				D	E	F	犯	G		I	J		L	M			P		
12				D	E	F	犯	G		I	J		L	M			P		
13		B			E	F		G			J			M2			P	Q	
14				D	E		犯	G			J	K					P		
15				D	E		犯	G			J			M			P		
16				D	E	F	犯	G		I	J		L	M			P		
17				D	E	F		G		I	J	K		M			P	Q	
18				D		F				I	J		L				P	Q	
19				D	E	F	犯	G		I	J		L	M			P		
20					E	F				I	J		L				P	Q	
21				D	E	F	犯	G		I	J		L	M			P		
22					E			G			J	K					P	Q	
23				D	E	F				I	J		L				P	Q	
24						F	犯	G		I	J		L	M			P		
25				D	E	F	犯	G		I	J		L				P	Q	
26				D	E	F	犯	G		I	J		L				P		
27				D	E	F	犯	G		I	J						P	Q	
28					E			G			J	K					P	Q	
29				D	E	F	犯	G		I	J		L	M			P		
30				D		F		G		I	J						P	Q	
31					E	F	犯			I	J		L	M			P	Q	
32				D	E	F	犯	G			J						P	Q	
33				D	E	F				I	J		L				P		
34	A			D		F	犯	G		I	J		L				P		
35				D		F	犯	G		I	J		L				P		
36	欠		C		E								L				P		
37			C	D		F		G			J		L		N		P	Q	
38			C			F		G		I	J		L				P		
39			C	D	E	F2	犯	G2		I	J	K2	L	M2	N2		P		
40	欠																		
41	欠	B	C	D	E	F	犯	G	H	I	J								
42	A	B	C	D	E	F	犯	G	H	I	J		L		N		P	Q	
43	A			D		F		G			J		L				P		
44	AB5		C	D	E			G2	H	I2	J	K	L2	M2	N2		P	Q	
45			C	D	E			G			J		L				P		
46	A	B		D	E			G			J		L				P		
47	A			D				G	H2	I	J		L	M			P	Q	
48		B		D			犯	G	H	I	J		L	M		O			
49			C	D	E	F2	犯	G			J		L	M			P		
50					E	F					J		L					Q	
51		B		D	E			G		I	J		L				P		
52		B			E						J		L	M					
53				D				G			J		L				P		
54				D				G			J		L				P		
55				D				G			J		L				P		
56			C	D				G			J		L				P		
57				D				G			J		L				P		
58		B		D				G			J						P		
59		B		D				G			J		L	M			P		
60			C	D	E			G		I	J		L	M			P		R
61	A	B	C	D	E			G	H2	I	J			M2	N2		P		
62		B		D	E					I	J		L				P		
63		B		D							J						P		

表3　場面構成

64			C		E						J		L				P		
65	AB2		C2	D	E			G		I	J			M2			P		R
66		B		D				G			J						P		
67			C	D	E			G	H	I	J		L	M			P		
68	A	B	C2	D	E			G	H	I	J	K	L	M2		O	P		
69	A	B	C	D2	E	F2	犯	G	H2	I	J		L	M2		O	P		
70	A	B2	C	D	E			G	H2	I	J2		L	M2	N	O2	P		R
71			C		E				H	I	J			M	N				R
72		B	C		E	F		G		I	J		L	M			P		
73	A	B2	C2	D	E			G	H	I	J	K2	L	M3		O2	P		
74			C	D			犯	G	H	I	J		L		N		P		R
75			C		E			G		I	J		L				P		
76	AB2		C	D2	E		犯	G	H	I	J		L	M	N		P		
77	A2		C2	D	E			G2	H2	I	J	K	L	M3	N		P	Q	
78		B2	C	D	E			G	H	I	J	K	L	M			P		
79		B	C	D				G	H2	I	J		L	M			P	Q	
80		B	C	D	E			G	H	I	J		L	M			P		
81	A	B	C2	D	E			G	H	I	J	K		M2			P		
82		B	C	D2	E			G	H	I	J		L	M2	N		P2		
83		B2	C	D				G2	H2	I	J		L2	M			P	Q	R
84		B		D	E					I	J			M			P		
85		B	C3	D3	E	F	犯	G	H	I2	J2		L3	M2			P2	Q	
86		B	C	D	E			G	H	I	J2	K	L	M2		O	P2		
87	A	B	C2	D	E	F2		G2	H	I	J		L			O	P		
88		B	C	D	E			G	H	I	J		L	M2			P		
89		B	C	D2	E	F		G	H	I	J		L2	M2			P		
90	A	B2	C2	D	E		犯	G		I	J		L2	M	N	O2	P		
91		B2	C2	D3	E			G	H	I2	J2		L2		N2		P2		R2
92	A	B2	C3	D3	E			G3	H2	I	J		L	M	N		P		R3
93		B	C	D2	E			G	H	I2	J	K	L2	M2	N	O	P		
94	A	B	C	D				G			J		L				P		
95		B		D2		F		G			J		L		N		P		
96	A2	B3	C	D	E	F		G	H	I	J	K	L	M2			P	Q	
97	欠									I	J3	K	L	M	N		P	Q	
98	A	B	C		E	F		G	H	I	J	K	L	M			P2		
99		B	C2	D	E			G		I	J2		L2		N		P2		
100		B	C	D	E			G	H		J		L	M	N		P		R
101		B	C2	D	E			G	H	I	J		L	M	N		P	Q	
102		B2	C2	D	E			G	H	I2	J	K	L	M2		O	P		
103		B	C	D	E	F		G			J						P		
104		B	C2	D				G	H	I	J	K	L	M2		O	P2		
105		B	C		E			G	H	I	J	K	L	M	N		P		
106		B	C		E	F	犯	G			J		L				P	Q	
107		B	C	D	E	F		G	H	I	J		L	M	N		P		
108		B2	C2	D3	E			G	H2	I2	J		L		N3		P2		R3
109			C	D				G	H		J		L	M			P		
110		B	C	D		F		G			J		L	M			P		
111		B	C	D	E			G	H	I	J		L	M	N		P		
112		B2	C	D				G	H	I	J	K		M	N		P		
113	A	B2	C2	D3	E			G3	H2	I	J		L	M	N		P		R
114			C	D	E	F		G			J		L		N		P		
115		B						G			J		L				P		R
116		B	C	D	E			G			J		L	M			P		
117	欠										J		L	M			P		
118			C	D				G			J		L	M			P		
119	A	B	C	D				G	H	I	J		L	M			P		
120	A		C	D				G			J		L	M			P		
121				D				G			J		L				P		
122				D				G			J		L				P		

表4　江戸期から現代までの「かちかち山」絵本のイメージ

江戸期 | 明治 | 大正 | 昭和 | 平成

1770　1860　65　70　75　80　85　90　95　1900　05　10　15　20　25　30　35　40　45　50　55　60　65　70　75　80　85　90　95　00

狸の捕獲場面

捕獲場所　畑・野良　言及なし……畑（山）……

捕獲理由　団子・餅及なし……畑荒し……

からかい＋畑荒し……

からかい……

捕獲方法　言及なし……わな…言及なし……わな……わな弁当……

まつやに……

餅　とりもち……

狸の様子　言及なし……悲鳴・涙など詳細に描かれる……

婆殺害・婆汁場面

狸吊るされる場所　軒・梁……

柱に縛られる　…　…

婆の騙し方　手伝い　（手伝い）　手伝い……

取引……　おわび……

（泣き落とし）　泣き落とし……

婆殺害　婆殺害……

婆怪我……

殺害方法　撲殺・絞殺・刺殺・食い殺し……撲殺・絞殺・圧殺・飛び付き……撲殺……

突き飛ばし……

殺害の絵　殺害の瞬間……殺害の一瞬前後……

殺害の語り　簡潔・一瞬……詳細、時の経過…

簡潔……

婆汁　婆汁……

婆汁なし……

婆汁の味　婆臭い……美味い……　食べない・婆臭い

狸の犯行声明……

爺の嘆き・兎登場場面

兎登場　白い兎・通りがかりの兎……仲良しの兎・通りがかりの兎……

悲しんでいるとちょうど来る……（見舞い）悲しんでいるとちょうど来る……

泣き声を聞き付けて来る……

爺の様子　爺、顔を覆い、泣く……

顔あげて座る、寝病する、腰抜かす、婆を抱きかかえる……

仇討申し出　兎申し出る……

爺頼む　爺頼む

兎の言葉　「仇を討つ」……

「なんとかする」「懲らしめる」「謝らせる」……

江戸期 | 明治 | 大正 | 昭和 | 平成

1770　1860　65　70　75　80　85　90　95　1900　05　10　15　20　25　30　35　40　45　50　55　60　65　70　75　80　85　90　95　00

復讐①　有り……

狸の誘い方　いり豆　言及なし……山遊び・いり豆　言及なし……歌・いり豆……団子・餅・焼芋・蒲焼・

刈るもの　柴……柴（茅）……新……柴・新……

刈る理由　銭になる　言及なし……銭になる・豆と交換・冬支度……

背負う理由　豆と交換　言及なし……豆（栗・魚・団子・餅）と交換・おだてら

やり取り　1回又はやり取りなし……1回・2回のやりとり……（3回）……

「かちかち山」……かちかち鳥・かちかち山……

「ぼうぼう山・嵐・風の音」　なし……ぼうぼう鳥・ぼうぼう山……

火が燃える場面　1画面で、簡潔、炎小さい……炎大きくなる……2画面以上、詳細な描写……

復讐②　有り・なし……有り……　……なし……有り……

復讐①からの時の経過　言及なし……翌日、しばらくして……

兎の否定　なし……兎の否定有り……

兎の行動　…見舞い……薬売り……見舞い……見舞い・薬売り……

塗るもの　蜜…唐辛子味噌……唐辛子味噌・辛子・辛子味噌・蜜・唐辛子水……

狸の様子　痛み、簡潔に語る……痛み、詳細に語られる、悲鳴……

背中を出して座る……飛び上がる・背中を出して座る……

兎の様子　刷毛を持って座る・立つ　真剣な顔……笑顔・真剣な顔……

復讐③　有り……

復讐②からの時の経過　言及なし……ある日　言及なし……しばらくたって　言及なし……やがて、翌日・しばらくして……

兎の否定　なし……兎の否定有り……

舟の製作者　兎のみ、兎と狸……（爺）……（爺）…

舟に乗る理由　船遊び・魚とり・宝もらいに…船遊び　言及なし……船遊び・魚とり…船遊び……言及なし……船遊び・魚とり……

舟歌　なし……舟歌有り……

狸の死　打ち殺される・溺死……溺死……

狸謝罪、救出される……

狸の様子　簡潔に語る……詳細に語る、悲鳴……

絵　引っくり返って海に落ちるところ……

水中に下半身が沈み、溺れる……首まで沈む……全身沈む・下半身・首まで沈む……

兎の様子　舟上で櫂を振り上げる・櫂持って狸を見る……

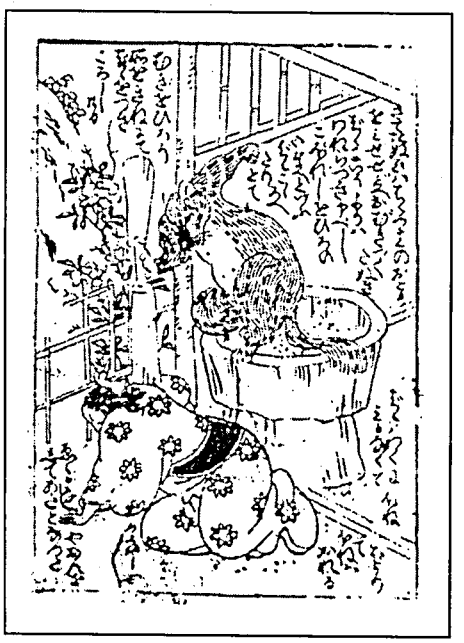
後日談　なし……爺に報告……なし……報告有り・なし……

（爺喜ぶ）　（爺喜ばない）

兎挨拶……

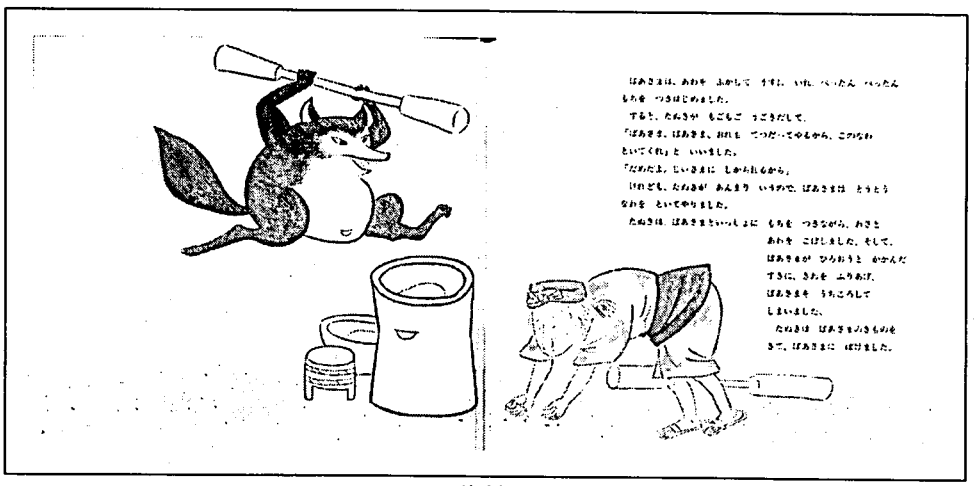
狸と爺婆と仲良く（食べ物食べる・手伝いする）……

資料1　かちかち山の構成



資料3

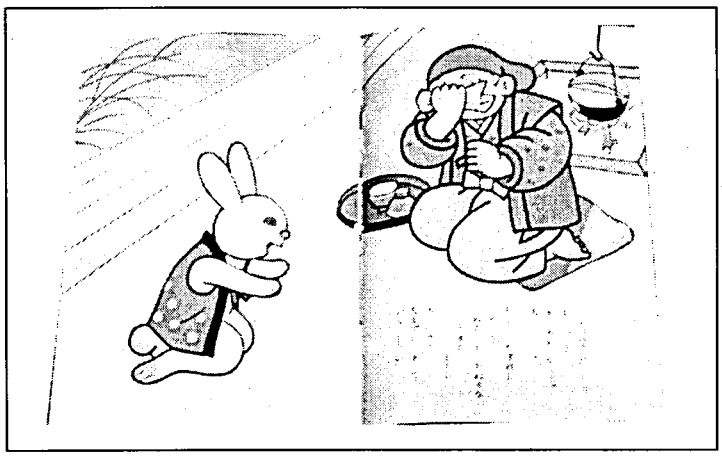
資料2　かちかち山の構造



ばあさまは、あわを　ふかして　すり、いれ、べったん　べったん
もちを　つきはじめました。
すると、たぬきが　もこもこ　でてきたので、
「ばあさま、ばあさま、おれも　つかって　やるから、このなわ
といてくれ」と　いいました。
「だめだよ、にいさまに　しかられるから」
「けれども、たぬきが　あんまり　いうので、ばあさまは　とうとう
なわを　といてやりました。
たぬきは、ばあさまといっしょに　もちを　つきながら、おさと
あわを　こねしました。そして、
ばあさまが　ひろおうと　かがんだ
すきに、さんを　ふりあげ、
ばあさまを　うちころして
しまいました。
たぬきは　ばあさまのきものを
きて、ばあさまに　ばけました。

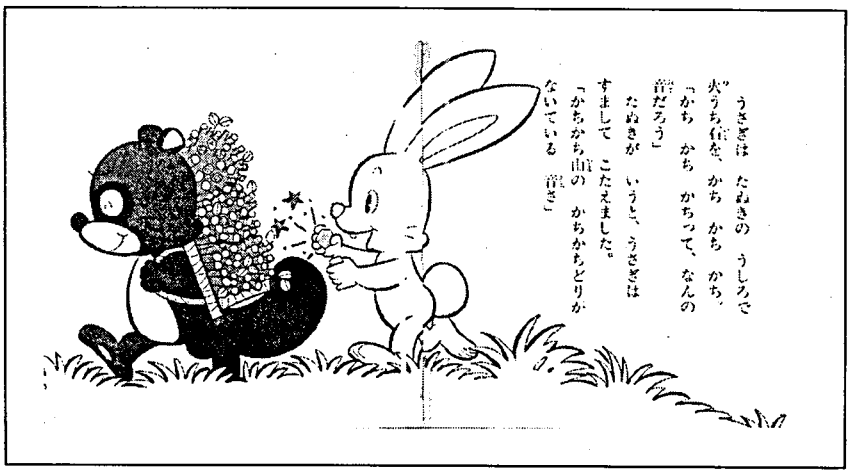
資料4

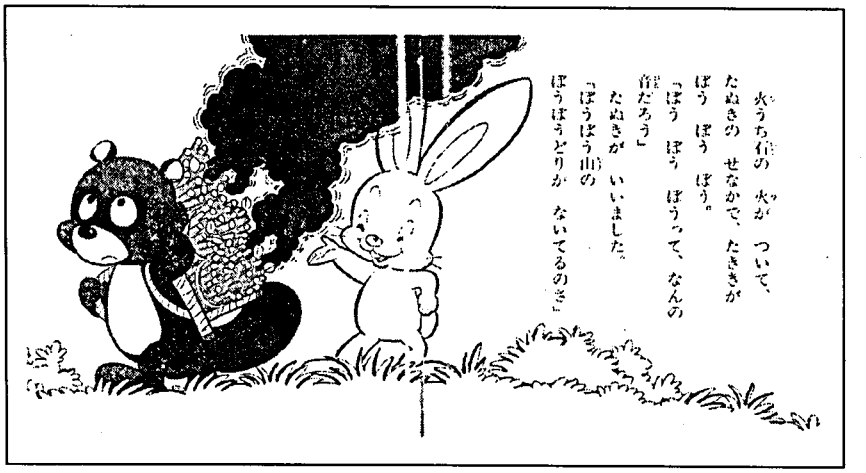
資料5



資料6

資料7


うさぎは たぬきの うしろで
火うち石を、かち かち かち、
「かち かち かちって、なんの
音だろう」
たぬきが いうと、うさぎは
すまして こたえました。
「かちかち山の かちかちどりが
ないている 音さ」


火うち石の 火が ついて、
たぬきの せなかで、たきぎが
ぼう ぼう ぼう。
「ぼう ぼう ぼうって、なんの
音だろう」
たぬきが いいました。
「ぼうぼう山の
ぼうぼうどりが ないてるのさ」

ぼう ぼう ぼう ぼう、たきぎは
もえて、たぬきの せなかに
もえうつりました。
「あっち、あっち、あっちっち」
たぬきは、火を けそうと
しましたが、たきぎは まだまだ
ぼう ぼう ぼう ぼう。
たぬきは
せなかに
大やけどを
してしまいました。

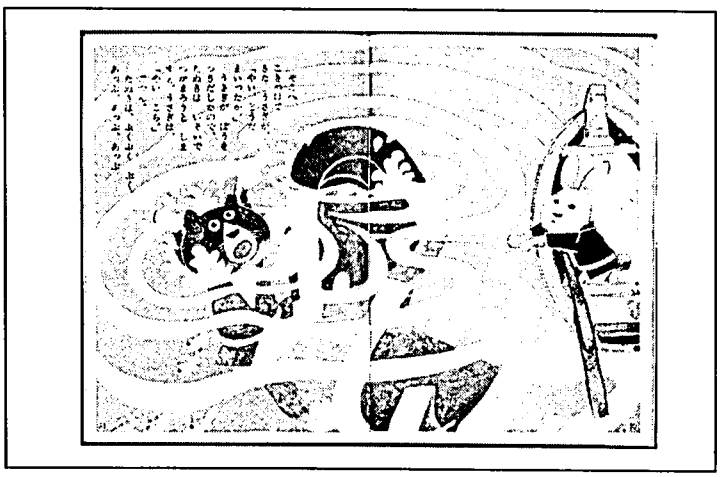
資料8

資料9

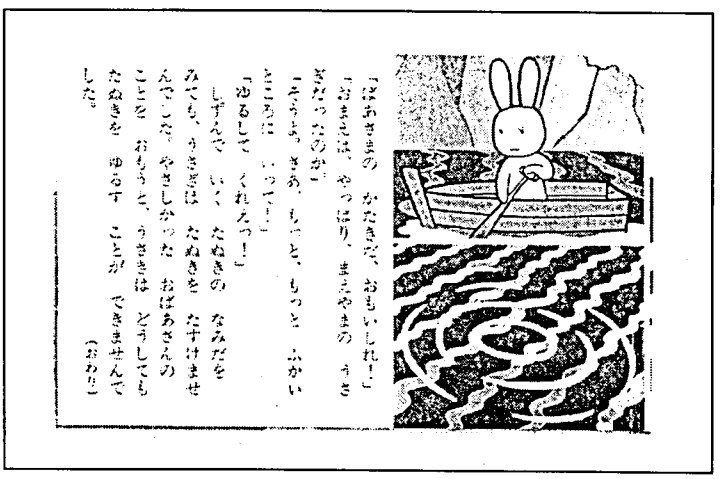
資料10

資料11

資料12



資料13



資料14

資料出典

資料１『かちかち山』(作者未詳、刊年未詳)東洋文庫内岩崎文庫所蔵　資料２『新カチカチヤマ』(湯浅彖策、春江堂、昭和元年)大阪国際児童文学館所蔵　資料３『かちかち山』(作者未詳、刊年未詳)東洋文庫内岩崎文庫所蔵　資料４『かちかちやま』(文－おざわとしお、絵－赤羽末吉、福音館、昭和63年)　資料５『敵討かちかち山』(文－未詳、絵－一斎、刊行年未詳)名古屋市蓬佐文庫所蔵　資料６『かちかちやま』(文－柴野民三、絵－おおもりゆみまろ、新子供社、昭和25年)都立日比谷図書館所蔵　資料７『兎大手柄』(作者未詳、刊年未詳)大東急記念文庫所蔵　資料８『かちかち山』(文－立原えりか、絵－サンリオアニメスタッフ、サンリオ、昭和62)大阪国際児童文学館所蔵　資料９『かちかち山』(文－未詳、絵－歌川芳虎、刊行年未詳)白百合女子大学図書館所蔵　資料10『かちかちやま』(文－滝原章介、絵－小春久一郎、ひかりのくに、昭和46年)岐阜県図書館所蔵　資料11『かちかち山』(文－篠田義正、絵－未詳、篠田義正、明治17年)国立国会図書館所蔵　資料12『カチカチヤマ』(文－巌谷小波、絵－岡野栄、中西屋書店、大正４年)都立日比谷図書館所蔵　資料13『かちかち山』(文－木下順二、絵－鈴木寿雄、講談社、昭和34年)　資料14『かちかち山』(愛プロ制作、講談社、昭和51年)岐阜県図書館所蔵

資料をご提供くださり、ご助言くださった肥田皓三先生、鈴木俊幸先生、アン ヘリング先生、様々なご教示くださった木村八重子先生、松居直先生、藤井康子先生に心より御礼申し上げます。また資料の収集にご協力頂き、資料掲載を許可してくださった国立国会図書館、都立日比谷図書館、大阪国際児童文学館、大東急記念文庫、名古屋市蓬佐文庫、岐阜県図書館、白百合女子大学図書館に深謝申し上げます。